ドイツ語音の一考察

塩谷　饒

緒　言

話される言葉は書かれる言葉の前に存在するものであり，從つて音聲の組織的な考察が言語研究の基礎となることは19世紀の後半以來認められてきた所であることは今更ここに繰返す必要はないであろう。ドイツ語の學術的研究に志すものは，その專門分野を何にするにせよドイツ語音についての組織的な知識を持つべきであると私は考える。しかも音聲の考察はたゞ專門書を繙くだけでは不十分で必ず生の音を自らの耳によつて聽き，その調音法を觀察し，場合によつてはその發音者の耳を滿足せしめうる程度に酷似した音を自ら發し得るよう努力する必要があるから，自らの操作を行うという習慣を養う上に最も直接的な効果を持つ。自らの觀察の結果を纏めること——この學問の公理が，我がドイツ語學界において割合輕んぜられていたのであつた。

私は以下にドイツ語音についての若干の考察を述べる次第であるが，今年は R. Schinzinger 氏，三浦アンナ氏，C. Fritsche 工學博士，Frau Wöss, C. Hüsch 氏，等の獨墺人，またスウィス系米人 E. Zaugg 氏の發話を仔細に觀察する機會が與えられ，またリングヴォンレコードの全體を通してきくことができ，且は東京より京都へ移つて關西方言を母語とする教授學生諸氏のドイツ語朗讀をきくチャンスに惠まれたので，雜然としたノートを少しく整理し，日本人がドイツ語音を如何に捉えて發音するかについても隨所に述べることにした。

I

リングヴォンのドイツ語コースの最初の一枚は Bühnendeutsch の權威 Th. Siebs がドイツ語音のサンプルを明瞭な發音で吹込んで居て，初學者の習得に好適な模範であると共に，音聲の觀察者にとつて甚だ興味あるものであるが，音の配列分類，とくにテキストに記された音聲の表記には問題となる點があるのは否定できない。

テキストにおいては die deutschen Laute 。 1. einfache Vokale 2. Diphthonge 3. Verschluszlaute 4. Reibelaute 5. Liquiden und Nasale 6. Affrikaten と分れているのであるが，レコードでは 2. Diphthonge 以下は各音のグループの前に音種の名前があげられているのに 1. einfache Vokale と讀上げられずに die deutschen Laute

と述べた後でいきなり〔i:〕Igel viel ihr‥‥と einfache Vokale に入つて行くのは他とのつり合いがまずいようだ。しかしそれは實質的には大したことではない。

Einfache Vokale の所では〔i:〕〔e:〕〔o:〕〔u:〕〔y:〕〔ø:〕等の閉音グループに對し〔I〕〔ɛ〕〔ɔ〕〔U〕〔Y〕〔œ〕等の開音グループの對比がはつきりした聽覺印象を我々に與える。日本語においては母音の短音と長音はこのように閉音開音と言い得る程の著しい調音の位置の差異は認められず，舌の緊張度にも變化は殆どないのであるから，ドイツ語諸母音の觀察には綿密な注意が要る。たゞしテキストにおいて區別されて表記されている開音の〔a〕と閉音の〔ɑ:〕は Siebs がその著 Deutsche Bühnenaussprache の中で述べているように音價の差は少く，レコードにおける聽覺印象上の差も殆どない。〔a〕と記されていても基音母音の前舌音ほど明るくなく〔ɑ:〕と記されていても，この記號であらわされる後舌の基本母音程暗くはなくいわば neutral な a- 音で Jespersen は Lehrbuch der Phonetik (§ 162) において〔A〕とあらわしているが，はつきり發音した日本語のアがこれに近い。實は日本語のアでもアイの連音では〔a〕よりになりアオアオの連音のア，ことに二番目のそれは多少〔ɑ〕よりになることが間々ある。

さてリングヴォンのテキストにおいては ö の短開音も長閉音を〔ø〕及び〔ø:〕で表しているが他の開音と閉音を區別して記している以上開音の場合は〔œ〕をあてるべきである。しかしドイツ語においては開音は短く，閉音は長いという一應の原則があるから簡略表記では〔i〕〔i:〕,〔e〕〔e:〕,〔a〕〔a:〕,〔o〕〔o:〕,〔u〕〔u:〕,〔y〕〔y:〕,〔ø〕〔ø:〕と記すことができるわけである。たゞ e- 音種には ä の綴字であらわされる開長音が存在するからこれだけは別に記號を使わないと（たとえば〔ɛ:〕等の），Ehre と Ähre 等の混同を來すこととなる。Bloomfield はドイツ語の母音の音韻論的解釋を次のようにしている。

	front		indifferent	back
	unrounded	rounded		(rounded)
high	i: i	y: y		u: u
mid	e: e	ø: ø		o: o
low			a: a	

(Language, p. 107)

これに從うと今のべた ä の長音の存在が無視されている點が具合惡い。しかし Jespersen によれば（上掲書 § 152）北獨においては長い ä も geschlossen の e で發音す傾向があると言うから，Bühnendeutsch の規定は如何にあれ，結局 Bloomfield の解釋が成立つことになるわけである。他の母音に見られる傾向は自然に e 音種に及んで統一ある體系を形成しようとするのである。

Bloomfield は弱音の〔ə〕を /e/ と音韻論的に解釋している(註)が，それは正しい。

それは此の音のあらわれる位置がアクセントのない音節に決つており，且說教，講演，法廷等の莊重な發音では開音の e〔ɛ〕が發せられる傾向があるからである。Siebs の著 (S. 42) では Oberdeutschland で geschlossen に發音される傾向があると言われるが，私はウィーン出の指揮者 Wöss 氏夫人がゆつくり發音した時，bekommen の be の e をはつきりした geschlossen の e を發するのを觀察した。

勿論 Siebs の吹込んだ〔ə〕は〔e:〕とも〔ɛ〕とも違つた音であつて，舌の高さは中等程度の中舌母音で，前舌は〔e〕の場合のように持上らない。

しかし英語の〔ə〕音種よりは狹く，精密表記では〔ë〕であらわされるものである。だから辭書や文法書のはじめに出ている簡略表記による音聲記號を見て英，獨共に〔ə〕であらわされるからと言つて同じ音であると速斷してはならない。その樣な危險を防ぐには何よりも實際の音聲に習熟することであるが，一言語内の音の實用的に必要な區別だけを認めてなるべく簡單な記號を用いようとする簡略表記と，色々の言語を比較し，更に音聲一般について述べる時に用いる精密表記のあること，及びその記號についての知識はドイツ語教師の是非心得ておくべき所だと思う。

この弱音の e と稱せられる〔ə〕が日本語のエ（精密表記では〔ë〕）と可成り異るものであることはリングヴァフオン・レコードの 1, 2 に Erich Drach が吹込んだ冠詞の der〔dər〕，又 Vater, Mutter, Bruder, Schwester, Tochter, Schneider 等の er における〔ə〕音，8 面にふきこんだ P. Menzerath の前綴 ge-, be-, ver- における〔ə〕の音を聞けば容易に了解されるであろう。前者は Bühnendeutsch に則つた發音において發せられたものであるが後者は北獨の教養人の普通の朗讀の調子を出した中で發せられているだけに興味深いものがある。何故ならば Bühnendeutsch においてこそ〔ə〕は語末の n, l の前でも同じような音價を保つているけれども，普通の談話では省略され勝で，ritten は〔ritn〕lieben は〔li : bn〕，更に b の兩唇の影響で〔li : bm〕，liegen〔li : gn〕，更に g の軟口蓋の位置が鼻音 n に及んで〔li : gŋ〕となり，Handel は〔handl〕，Sattel は〔zatl〕となり，〔n〕（及び前の子音によつて同化された〔m〕，〔ŋ〕と〔l〕）が音節を形成するに至ることはよく知られている所であつて，それだけに上述の前綴等における〔ə〕が目立つてくるのであるから。

所でこの逆に末尾の〔子音＋n〕がが元來の〔子音＋ə＋n〕の省略の如くに感ぜられ，丁寧な發音では實際に〔ə〕が入されることも起る。

私は本年五月 Frau Wöss が Haydn についてゆつくりと東大教養學部生の前で講義した時，〔haëdən〕と繰返すのを同席の氷上英廣氏と共に觀察した。もつとも精密な表記では ə は〔ë〕乃至〔ɛ〕の間を動搖し，ほゞ〔è〕であることもあつた。

またこの〔ə〕は und と言つて次の語や文の續くのを待つ時ややゝ長めに〔Untə·〕と附加されることがあるが，レコードの 9 面の Unterhaltung で E. Drach は Ach といつて一寸次の文を考えているが〔a : xə·〕と〔ə〕を附加えている。

リングヴォフオンで一番問題となるのは3番の geschlossenes e の長音，4番の offenes e の長音の間にテキストでは番號をつけることなく geschlossenes e の短音として elf, jetzt を例にあげ，そして5番に offenes e の短音を入れていることである。だから Siebs はここで4種の e をあげて語例をあげているのであるが，實は geschlossenes e の短音としてあげられたものは Viëtor の Deutsches Aussprachewörterbuch では勿論のこと，Siebs の Deutsche Bühnenaussprache においてすら Offenes e で記されるものなのである。一體ドイツ語の e は歴史的に見ても，地理的に見てもなかなか複雜で，H. Paul によれば古代においては短音に閉ぢたものと，中等程度のものと，全く開いたものがあつたと言うことであり (Deutsche Grammatik BI § 46), Siebs もそのことと現代方言においてまちまちであることを述べている。(前掲書 § 2 e-Laute)

しかし Bühnenaussprache では短音は外來語でなければ悉く開音に定められて居るのであつて何故この jetzt と elf の e を閉音としたのか理由が分らない。果して Siebs の吹き込んだ短音は閉音の〔e〕であろうか。否である。我々は閉長音の例が終つてこの音が單獨に發せられる時，急に廣く發せられるのを認める。そしてこれを五番の offenes e〔ɛ〕が單獨に發せられるのと比較するとその與える聽覺印象は殆ど變らぬことに氣付く。もとよりレコードにおいては發音者の口を目で觀察し，舌の緊張度を觸れて見ることが出來ないから絶對同一だとは斷言できないが，特別に音聲學的訓練を經ないドイツ人は同一の音と認定する程度に酷似しているものである。たゞし例としてあげられた jetzt の e はやゝ狹く，精密表記では〔ɛ〕と〔e〕の間の音である〔ȅ〕と表せるものであるが，それでも geschlossenes e よりは大部ひろく，東京方言等のエに近い。(前者は新潟方言のエに近い。) この場合もつと廣い〔ɛ〕にならなかつたのは前舌面と硬口蓋の間できわめて狹いせばめを形成する〔j〕が先行しているためである。このように嚴密に言えば多少の違いも認められないこともないが音韻論的には〔ɛ〕と對立するものではなく，初學者のための音例として區別するのは不適當である。geschlossenes e の外來語中における好例はレコード8の Menzerath が發音した Lichtreklame の re における e, elektirisch の e である。これに對して10における Funke の telephonisch の二つの e は〔ȅ〕よりである。

Siebs の吹きこんだ開音の〔ɛ〕は可成基本母音の〔ɛ〕に近い廣いものであるが，實在の方言（たとえば北ドイツ）の中には開音の e が何れもそれ程廣くなく〔ȅ〕であることが多く (Jespersen : § 152)，リングヴォフォンにおいてもそれは盛にみとめられる。そのような發音をもつ人も r の前では〔ɛ〕となる傾向がある。たとえばレコード5の Drach は Personen〔pɛrzo : nən〕, Herr〔hɛr〕と言つているが，その後で〔nȅ : mliç〕と發音している。京大講師三浦アンナ女史の開音 e も Siebs のように廣くはなく，精密表記の〔ȅ〕であり，geschlossenes e も Bühnedeutsch 程せま

くはなく，無意識の發音では北ドイツ人の典型的なタイプで長閉音と長開音を共にやゝひろい長閉音で發音し，Ähre と Ehre がほとんどひとしくなる。

開音の o 及び ö についてみてもこれと同じことが言えるのであつて，方言及び個人によつては Bühnendeutsch 程口を廣くあけず，〔ɔ〕と〔o〕の間の〔ȯ〕，〔œ〕と〔ø〕の間の〔ø̞〕が聞かれることが多く，また e の場合と同じく r の前の o が〔ɔ〕となることが多い。

〔y〕〔Y〕〔ø〕〔œ〕の所謂 u, o Umlaut は普通前舌母音〔i〕〔I〕〔e〕〔ɛ〕の圓唇化であり，その圓唇の程度は〔u〕〔U〕〔o〕〔ɔ〕のそれに等しいと言われる。それは發音の要領を示す實際的な記述としては差支えないと思うが，精密な觀察は必ずしもそうでないことを告げる。服部四郎博士はその著音聲學の中で (p. 127)，„前東京帝國大學文學部講師 Otto Kurz 氏のドイツ語の發音において，u と ü との圓めの著しく異るのを觀察したことがある。" と述べ，誇張した場合に u は唇が著しく前へ突出され，ほとんど圓形となるのに後者では唇が前へ突出されることなく前齒に押しつけられたようになり，口のせばめは長軸が水平の方向を向く橢圓形に近い孔を形作ることを記し，他の二三のドイツ人にも同樣な傾向のあるのを觀察した旨記されているが，私の觀察した所でも三浦アンナ氏はこの傾向をもち明白な發音においては〔u〕の圓めは圓形であるのに〔y〕ではせばめが上下に強く，橢圓を形作る。たゞしその場合〔u〕程ではないが〔y〕でもやや口唇は前につき出される。〔o〕と〔ø〕においても程度は著しくないが同樣な傾向が認められる。その他 Wöss 夫人，Robert Schinzinger 氏，C. Fritsche 博士らにおいてもその圓唇化の程度が異るのを認めた。

さて日本人は geschlossenes e, ö, ü 等の習得に困難を感じ，相當名のうれた獨文學者でも甚しいのは ü をユ，ö をイヨ等と發音したのをきいたことがあるが，語學教育の進歩と共にだんだんそういうのは減りつつある。しかし東日本(東北を除く)に育つた人は餘程注意しないとドイツ語の u 音を平唇のウ〔ɯ〕でおし通す傾向がある。近畿地方においては比較的圓い口唇で發音されるが，ドイツ語の場合は一層丸く，且前へ突出していることに注意すべきである。

(註) 音韻論的解釋は / / の中に入れる。國際音標文字は普通〔 〕に入れて區別する。

II

リングヴァフォンのテキストの二重母音の表記は全體的に問題となる。

まず第一にあぐべきことは二重母音の記號の次に長音の記したる：が附されていることである。「ae：「oo：」「oy：」そして他の長母音の場合と同樣に語例においては何ら明白な原則を示すことなく或語は全長の：を示し，或語は半長の・を示していることである。この表記に從えば二重母音の第二要素を長く讀むことになるわけである

が，このレコードを吹きこんだ Siebs は如何に二重母音を見，また實際に發音しているか吟味する必要がある。

そもそも二重母音は ,, 連續した二つの母音で同一音内にあるもの " と Sievers, Jespersen はじめて多くの音聲學者の定義する所で，普通一方が音節の主音で他方が副音であり，後者が短いことが多い。ドイツ語の ei (ai), au, eu (äu) にあらわれるもの主音の次に副音が來る最も普通な二重母音である。

Jespersen は ,, fallende " oder ,, eigentliche " Diphthonge と呼んでいる。(註1) Siebs は Bühnenaussprache において二重母音そのものの詳しい說明は行つていないけれども，ai, au, eu の各々について第一要素が短く，第二要素が甚だ短くあるべきように規定し，實際その要領を以てレコードに吹込んでいるのであるからこのテキストの長音記號は取去るべきである。Viëtor によれば(註2) Niederhein おいては ai を〔ei:, ɛi:, ae:〕と發音し，ベルリン人の中には au を〔ɔu:〕と發音するものもあるとのことであり，私自身もレコードの 2 の Unterhaltung において ,, Stehen alle Personen im Zimmer? nein, nicht alle." 。nein が〔nae:n〕と長めに發音されるのを聽いたが，前の場合は標準音ではなく，後の場合は色々と表情をつけて一定の發音の型を破り易い間投詞に準ずる語の一時的な發音に過ぎないのである。

問題は〔ae〕〔ɔo〕〔ɔy〕と言う音の表わし方にもある。一體我が國のドイツ語界にはこの三つの二重母音の表記法は Siebs の Bühnendeutsch の規定を音標文字に書變えた〔ae〕〔ao〕〔ɔφ〕と Viëtor の示した〔ai〕〔au〕〔ɔy〕の二通りが導入されていたが，各々のよつて立つ原則乃至は正確な音價についての吟味が行われず，徒らに初學者を混亂させていた。Bühnendeutsch の〔ae〕〔ao〕〔ɔφ〕は低獨の發音を採用したもので，高獨各地では〔ai〕〔au〕〔ɔy〕と發音していると言う說明も見られるがこれは檢討を要する樣である。(註3)

たとえば 1950年 Bern において發行された Eugen Dieth の Vademekum der Phonetik においては〔ae〕〔ao〕〔ɔφ〕の表記で Hochdeutsch の二重母音を一貫して示しているのである。

實はドイツ語の綴字 ai で示される二重母音は或方言又は個人で主音が a 音種ではじまる場合副音が〔i〕の方向へ少し動いてゆくだけで〔ai〕の聽覺印象を與えるため，實際の發音においては〔ai〕となることが多くはなく〔ae〕，甚しい時には〔aɛ〕で終ることもあり，また一方副音 i を本當に i 音種で終らせる時は主音が〔æ〕〔ɛ〕位でも〔ai〕の印象を與え，(註4) 結局 a 音種から i 音種への運動を二重母音 ai と見なされているのである。普通は主音の a が廣く發音されるため副音が i の位置に到達しないことは Jespersen も Sievers の例を引いて述べている所であつて，(註5) Siebs が主音を短い（明るい）a とした時，副音を geschlossenes e としたのはこの舌の調音點の傾向を認めたことによるのである。しかしこの副音 e は長音の geschlossenes e と異

り，甚だ短い上に弱いものであるから精密な表記では〔ĕ〕と表わされる。geschlossenes e は日本語のエ〔è〕よりはせまく〔i〕によつた音であるから〔ae〕と言う表記をアエと讀むのはもとより正しくない。因みに英語のIにみられる二重母音も簡略表記では〔ai〕と表しているが舌の位置はeの程度をこすことはまずなく精密表記では〔aĕ〕である。Viëtor が ai を〔ai〕と表した時，〔ae〕と區別しようとする意圖を持つたものではあるが，彼も副音 i が非成節的な i であることを意識し Elemente der Phonetik においては ɔĭ と表して居り，嚴密な音價としても ĭ は ĕ にきわめて近い音なのである。これを考慮した上に我々は多くのドイツ人の發音を觀察して見ると〔ai〕と言う表記はa音よ種り i 音種への運動を示す二重母音の簡略表記であると解釋できる。

同樣なことは au にも見られる。實際の發音においては〔ao〕〔au〕〔ɒo〕〔ɒu〕〔æu〕〔ɔo〕等主音も副音もさまざまであるが，明るいa卽ち〔a〕に續く副音は後舌面が〔o〕程度のもち上りに過ぎぬことが多く，——私は三浦アンナ氏(北ドイツ人)，Wöss 夫人(オーストリヤ人)，C. Fritsche 博士(ウェストファリヤ出身)，G. Hüsch (ハーノヴアー出身)，R. Schinzinger 氏(フライブルク出身)等の諸氏にそれを認めた——從つて Siebs はこの事實にもとずいて副音を geschlossenes o としたと考えられる。しかもそれは彼自らのべているように甚だ短く弱いものであつて精密表記では〔ŏ〕で表すべきものであるから Viëtor の示す u と區別しても極めて近い音である。我々はやはり之を考慮しつつ多くのドイツ人の發音を觀察した結果を顧りみ，〔au〕なる表記はa音種にはじまりu音種への動きを示す二重母音の簡略表記と見なし得るのである。英語の owl に見られる重母音も普通は〔au〕と記されるが副音の舌の位置は〔o〕のことが多い。(註6) eu の綴字が示す二重母音はその主音も副音もなかなかに種類が多く，Jespersen の示す所に從えば(註7)〔òY, ɔɸ ɸY, œɸ, òi, ɔe〕等が見られるが開いたoから〔y〕の方向へ動く二重母音であり，嚴密な觀察では開音oに續くと舌と丸めが〔y〕の位置に到らず〔ɸ〕程度の場合が多く Siebs の示す根據が察せられる。

Siebs はレコードで勿論自分の示した原理に則り〔aĕ, aŏ, ɔɸ〕と吹こんでいるがそれは a→i, a→u, ɔ→y の方向を示す二重母音として音韻論的には /ai/au/oy/ と解釋し，實用的には〔ai, au, ɔy〕と表記できるものである。そこでテキストにおいて au が〔ɔo〕と表記されているのは不合理である。實在の方言にはこのようなものあり，音聲學的訓練を經ない耳には au に近くひゞくものであるがそれは Siebs 自ら排する所の音であり，このレコードでは明白に〔aŏ〕の〔a〕と同種であつて，〔ɔ〕音ではないことは次の eu に含まれる〔ɔ〕音と比べて聽くものは直ちに認め得ると思う。第三の eu を〔ɔY〕と表記したこと。嚴密には〔ɔɸ〕と記すべきこの音が開音のYを副音とする〔ɔY〕ときわめて近く，ことに euch の如き語では〔ɔY〕で表し

うるのを Siebs 自身の發音からもきゝとれるが，副音が必ずしも Schön 等に見られる〔ɸ〕と同一でないことを辨るならば，やはり Bühnendeutsch に統一して〔ɔɸ〕と表すのが妥當で，さもなければ何れも簡略表記の〔ai, au, ɔy〕とすべきことは明白である。

(註1) O. Jespersen : Lehrbuch der Phonetik, § 212 (1)

(註2) W. Viëtor : Elemente der Phonetik, § 48. Anm. 4. 5.

(註3) 市河博士還暦祝賀論文集第一輯内の相良守峯氏ドイツ語隨考 52頁。

(註4) Jespersen 前揭書同項

(註5) 同上，またオランダ語の ij は標準語では〔ɛi〕と發音されるが日本人の耳にはアイに近く聞える。同じく ou は〔ɔu〕であるがドイツ語の二重母音に au 類する印象を與える。

(註6) 英語學辭典 Diphthong の項.

(註7) Jespersen 前揭書同項.

(註8) Siebs : 前揭書.

III

子音のグループはリングヮフォンにおいて問題となる所は少いが，音聲の觀察には興味ある點がある。

Verschluszlaute : p, b̥, t, d̥, k, g で表わされている閉鎖音はドイツの各地方で色々に發音されているが Bühnendeutsch では北獨方言に則り，〔p〕〔t〕〔k〕は無聲の帶氣音，〔b〕〔d〕〔g〕は有聲（無氣）音の系列に定めて居り，弱い帶氣の無聲音をもつ日本語を母語とする人には習得が比較的容易である。(註1) なお Siebs は長母音の語末の b d g は p t k と同一でなく，後者は母音との間に pause があつて急に强く始まるのに，前者では母音との間に明かな pause がなく弱く始まると規定して b̥ d̥ g̥ とあらわして居り，それは r, l, n の次でも同じであるとしている。Umgangsprache としてもこの兩者を叮嚀な發音では區別して發音するドイツ人もあり——たとえば三浦アンナ氏——音聲學的に觀察することは價値あることであるが，兩者の差は音韻論的な對立をなさず，ともに /p/t/k/ として /b/d/g/ と對立するもので，實用的には共に〔p〕〔t〕〔k〕で表わされる（註2）。Siebs もレコードでは Berg, Balg を〔k〕の語例にあげている。純音聲學見地から言うと普通 b, d, g で表わされる子音が Siebs の區別した弱い無聲音である方言がある。〔ligə̥, haldə̥〕= liegen, halden (南獨方言) 〔ə dy:tʃə bu:r〕=ein deutscher Bauer (スウイス Bern 方言) スウイス方言においては〔p, t,k〕は〔b̥, d̥, g̥〕と對立している。

Verschluszlaut のうち特に〔k〕〔g〕は後續する母音や子音によつて調音點が異り

〔ki, gi〕では硬口蓋の最後部であるのに〔ku, gu〕では軟口蓋（それも時に可成後部）であるが，單獨に〔k〕で終る時には〔I〕〔i:〕の後で著しく口蓋化される傾向がある。私は Frau Wöss の Sieg, stieg における發音でそれを觀察した。

Reibelaute: 唇齒摩擦音〔f〕は日本語のフの頭音に見られる兩唇摩擦音〔ɸ〕と近い聽覺印象をあたえるが前者の安定した調音位は鋭い音色を持つ。日本の學生は英語等で銀えられないと〔ɸ〕を以てあてる傾向があり，ドイツ人教師からもつと强く發音せよと注意される。〔v〕は同じ調音位置の有聲音であるが英佛の〔v〕に比べると摩擦が少く，Schwester の如く〔ʃ s〕等の無聲音にかこまれると無聲化し〔v̥〕から更に〔f〕となり易い。南ドイツ方言では兩唇の有聲摩擦音の〔β〕で一層摩擦が弱いから Wien und Wein と歌うと日本人の耳にはウイーン，ワインと聞える。

〔s〕〔z〕の列においては母音の前のが南獨では無聲化する傾向のあるのは周知の事實であるが，日本人が〔z〕を發しようとする時には餘程の注意がいる。というのは日本語の多くの方言においてザ行のザゼゾが語頭に立つ場合は〔z〕ではなく〔ts〕の有聲の破擦音〔dz〕であるからである。多くの關東の學生，教師は sehen, sah を〔dzè:èn, dzɑ:〕と讀む。近畿方言においては閉鎖的要素が極めて弱く，人によつては純粹の〔z〕音を發するからドイツ語を讀む時にドイツ語音に近い〔z〕を發する。

ドイツ語の綴字 sch で表される摩擦音〔ʃ〕は前舌面が齒莖に向つてもち上ると共に調音點の前に幅がやゝ廣く長さのやゝ短い空洞を形成しここに呼氣が吹き込まれてくるのであるがそれが口唇の丸めによつて一層强められて鋭い音を出し，日本語のシの子音とは大部異る音色を持つ。日本語のシも調音點の前に空洞ができるが前舌面全體が硬口蓋にもち上つて居り，唇は平い。ドイツ語音の鋭さはリングァフォンでも十分ききとれるが，唇の丸めは實際の發音を外から觀察すれば直ちに認めることができる。なおシの子音は東京方言も京都方言も略ひとしく，ドイツ語との對比を學生にする場合も同じ注意でよい。

〔3〕は元來のドイツ語音でなくフランス語借用語に現れるが，日本語のジャ，ジュ，ジョは東京方言などにおいては語頭でシャ行子音の有聲でなく，チャ行の有聲音を發する故に簡單にこれをあてはめぬように注意が要る。

前舌面と硬口蓋の間の狹めを通して發せられる無聲摩擦音の ich-Laut〔ç〕は日本語のヒに見られる〔ç〕よりは調音點がやゝ前である。

關東地方の多くの學生はヒの子音としてドイツ語に近い摩擦音を持ち，ヒト，ヒカルの如く次の音節が無聲子音で始まると母音を脫落して〔çto〕，〔çkaru〕のように發音するからドイツ語の〔ç〕の習得は割に樂であつて〔hœçst〕のような連音もよく發音するがヒの子音にhをもつ人——近畿方言に多い——はなかなかに困難を感ずる。

〔ç〕の有聲音〔j〕は實在の方言では可成弱く發音されることも多いが Bühnendeutsch においては摩擦が强い。ja〔ja:〕の〔j〕も英語 yes の〔j〕より普通せまい調音點

をとるが，偶發的に無聲化して〔j̊a:〕若くは〔ça:〕となることがある。リングヴォンレコードの 18 Unterhaltung にはその典型的な例が見られる。

所謂 ach-Laut〔x〕は後舌面と軟口蓋との間の狹めによる摩擦音であるが，先行する母音によつて調音の位置が異り，〔U〕〔u〕〔ɔ〕〔o〕等の圓唇後舌母音の後では第二調音としての唇音化が見られ精密表記では〔x〕の下に小さく ω をつけてあらわされるものである。Bühnendeutsch では a, o, u の後の ch が〔x〕であるが，方言によつては他の母音の後でもあらわれることがあり，私はウェストファリア出身の C. Fritsche 博士が möglich を〔mφ:xliç〕と發音するのを觀察したことがある。スウィス方言においては〔ç〕を持たず，凡て〔x〕であるというが，ウィーンの出身の Frau Wöss は標準ドイツ語を意識しないで語るとき durch の ch を〔x〕で發音することがある。これは r を Zäpchen で發音するため〔x〕の構えが容易になつて起るのである。(註3)

〔h〕は Siebs の著では簡單にとり扱われているが彼が吹きこんだレコードでは Uhu, Oheim のhが先行する語のhと著しく異つているのに氣が付く。これは二つの母音間においてhが有聲になるためで精密表記では〔fi〕で表わすべきものである。日本語においても母音に先立たれたハヘホの子音が屢々そうなる。判と御飯を比較するとわかる。Siebs の吹きこんだ aha が普通のhなのは後のaにアクセントがおかれたためである。これに對し，hが母音でなく有聲子音に先立たれてもやはり有聲化することがあり，Bahnhof が屢々そうなる。そして日本語においても御飯のhが〔fi〕となり，更に早口では脱落してゴアンとなるように Bahnhof の hof のhも有聲化から脱落するに至ることがあり，リングヴォンの11課の Unterhaltung にはそれが現れている。

Liquiden und Nasalen : Liquiden (流音) とは古典文法の術語を踏襲したもので r, l を指すが，音聲學的には不正確な表現で前者は顫動音 (gerollt, Zitterlaut)，後者は側面 (lateral, Seitenlaut) の分類に入る。しかしこの r, l, 及び Nasalen を一つのグループにしたのはその Sonorität が大きいこと，屢々成節的となることの共通點を捉えたものと思われる。

ドイツ語のは標準語では先舌の顫動音〔r〕であるが，多くの人によつて懸壅垂顫動音〔R〕を以て發せられることは周知の事實であり，テキストが〔r, R〕と並記した趣旨は分る。しかし Siebs は專ら自己の規定通り舌先のrで吹込んでいる。レコードでは初めのうちは記述も會話も舌先のrでゆつくり發音しているが3面から語尾の -er が〔ə〕と發音されることがあり，4面からは多くなり，nur, vier vor 等も自然に〔nuə〕,〔fiə〕,〔fɔɔ〕と發音されることが多くなり，冠詞 der も〔dèə〕から更に〔də, da〕と讀まれることも增えてくる。また當然のこと乍ら懸壅垂の〔R〕も時にきこえ (たとえば11面の geworden, warten の r)，次の無聲子音に同化されて〔R〕が

無聲の〔R̥〕となり，Sport の如きは〔ʃpɔR̥t〕と發音され殆ど〔ʃpɔxt〕に近くきこえることがある(14面參照)。東京の下町方言には舌先の顫動音があり，日本の學生も〔r〕は半數位發し得る。普通日本語のラ行子音は時々誤つて記述されているが語頭においては英語のdに近い齒莖閉鎖音であるか，人によつては一種の1音であり，母音間では彈音の〔ɾ〕であるから〔r〕で表すのは全く音韻論的顧慮にもとずいた簡略表記でドイツ語のr音とは異る。ドイツ語の1は英語の語末又は子音の前の1のように dark 1 となることなく clear 1 であり，又調音點も英語より前で〔t〕〔d〕の閉鎖に準ずる。語頭のラ行音に1をもつ人は無意識にドイツ語の1に近い發音をする。

鼻音について問題は少い。〔m〕〔n〕〔ŋ〕とも日本語に同種音がある。しかしドイツ語の語末のnは後續する語がないと多くの日本人學生によつて單獨に發音されたン卽ち舌根と懸壅垂の間で閉鎖がおきる鼻音〔N〕で代置される傾向がある。また日本語のニの子音は dental な n と言うよりは口蓋鼻音の〔ɲ〕であるがドイツ語の〔nI, ni:〕に之をあてやすい。ドイツ語では語が連結せざる限り重子音又は長音は起らないが，間投詞に類する語では偶發的に伸ばされることもあり，リングァフォンでは5面の Unterhaltung の „na, das ist nicht so ohne weiteres zu sagen.“ の na:〔n:a〕と，24面の „nein, das ist schnell gemacht.“ の nein も〔n:aēn〕と長く發音されている。また Hm を以て表わされる間投詞には無聲化と長音が同時にあらわれる。レコード10面の Unterhaltung の Hm は〔m̥m:m̥〕と發音されている。

Affrikaten : Affrikat とは閉鎖音の次に調音の近い摩擦音が續き，それが強めの弱まりがなく一音節中にあるものと言うのが音聲學の術語であるから，レコードにドイツ語の典型的な〔pf〕〔st〕〔tʃ〕を擧げたのは當然であるが，最後に〔ks〕をあげたのは不當である。〔k〕は軟口蓋閉鎖音であるから同種の摩擦音としては〔x〕が Affrikat の條件に適うものであり，現にスウィス方言においては kann〔kxan〕, Strecke〔ʃtrekxə〕の如くこの Affrikat が存在している。Siebs は Affrikat をその Bühnenaussprache の中で特に問題として居らず，その指示を與えていない。〔ks〕をレコードで Affrikaten の中に加えたのは閉鎖音に摩擦音が續いている點を顧慮したためと，それが色々の綴字で表わされる所から音例としてあげておいた方が初學者の習熟に都合よいと言う實用的判斷によるものであろう。

(註1) 佐久間鼎博士は日本音聲學の中で國語の無聲閉鎖音は帶氣せぬ旨記しているが (p 147)，實は多少帶氣する。服部博士：音聲學 (p 138) 參照。

(註2) 私の日本語の無聲閉鎖音〔t〕もイト (糸) イタ (板) の如くアクセントある母音に先行されると帶氣せず，又純粹の無聲ではなく〔d̥〕となる。

(註3) ドイツ語の ch が〔ç〕〔x〕に分れることは先行する母音が決定することであり，このように〔ç〕〔x〕の交代がおきて意義の混同を來すことがないために，音韻論の單位たる音素としては/x/に統一することができる。Kuchen〔ku:xən〕, Kuhchen〔ku:çən〕; pfauchen〔pfauxən〕, Pfachen〔pfauçən〕においては同じ環境で〔ç〕〔x〕の兩音が現れて意義の區別に役立つているけれども Kuh-chen, pfauchen は形態的に Kuh-chen, pfau-chen であり音韻の記述でも /ku:xen/ku:-xen/ と書わければよいことになる。日本の子供がよくやるノサ言葉のように Silbeneinschub はドイツにもあり Joachim Ringelnats は Bi-Sprache と言う詩で „Habist aubich dubi mibich?" と書いているがこういうものでは ach-Laut, ich-Laut の區別がなくなりしかも聽者はその意義を了解するのである。

無聲子音間において母音の無聲化又は脱落する傾向のない關西方言を語る學生は gemacht の如き語における連音〔xt〕は母音を入れて〔xat〕, 或は〔hat〕と讀むことが多い。これに對して關東地方の學生には China の〔çi:〕と hier の〔hi:〕とが區別できず，共に〔çi:〕と讀むものが甚だ多い。

Ⅳ

リングァフォンレコードは個々の語の發音や，Spoken language の表現法と共に，實際に讀まれる朗讀文の文調と共に，自然の會話の文調を習得するのに好適なものであることは論を挨たないが，それらを觀察すると普通 Schulgrammatik で全く機械的に說かれている型にはまらない場合が屢々現れることに氣付くのである。しかしそれらはたゞやたらに型を破つているのでなく，話し言葉の自然な型に入つた文調であることが認められる。すでに規定の紙數を超えたためここにそれを詳細に論ずることができないのは殘念であるが，最も代表的な二つの型について述べて見ることにする。

a) 疑問文において疑問代名詞または疑問副詞を以て初められるものは質問の內容が文全體に關係するというよりはむしろ疑問の代名詞や副詞を以て表わされている文の一部に關係するだけであるから，一種の敍述文と考えることができ，從つて文調も文末を揚げないのが普通であるとは多くの書物に說かれているが，リングァフォンの1面の Unterhaltung から終りに至るまで文末のあがる文例は枚擧にいとまがない程である。Was tut er? ⟶ Er raucht eine Pfeife. このように短い疑問文でも(1面) ゆつくりと語られる時には全體を支配する疑問の氣分が文末で意識されてきて普通の疑問調に變るものと思われる。これと同じ原理で，早く話される場合でも期待が强い質問となると文末が上つて相手の注意をうながすことになる。Wann kann ich es bekommen? ⟶ Wenn Sie erwünschen, noch heute abend,

sonst morgen früh. (24面) また疑問詞を以て初まる文に，その內容を規定する疑問文が續くとき，疑問をたゝみかける調子がでて尻上りとなる。 Aber wie kommen wir dahin? Mit der Eisenbahn? (17面)。ここは dahin の hin が上る。

b) 敍述文は普通それ自體意味が完結するものであるから文末の調子は下降的となる。そこで朗讀の場合も Punkt の所は聲をさげて讀むのが普通である。しかしリングヴォンにおいてはテキストで Punkt となつている所でも，聲を下げず次の Satz に續けてゆく場合がある。たとえば Frau Herrnstadt-Oettingen が24面で ,, Die Schneiderin und die Putzmacherin " を吹込んでいるが，その終りの方に次のような一連の文章がある。····ich fürchtete schon, das Fräulein, das sie wartete, möchte ungehalten werden. Jetzt war sie aber an der Reihe. Sie paszte ihren Rock an; der sasz ihr aber bei weitem nicht so gut wie vorher auf der Probierpuppe. Die Zuschneiderin streckte ihn mit ein paar Nadeln zurecht und brachte ihn zur Arbeiterin ins Nähzimmer. Die Sportjacke für die junge Dame war aber tadellos ausgefallen. Das Muster auf dem Modebild war nicht besser. このうち Punkt の前で下降しているのは最後を除くと Reihe の所だけであとは下らず次の Satz につゞいている。

これらの文章は文法的には一つ一つは完結しているがそれは全體の一貫した行動の一こまで，心理的にはそれだけでは完全に終つたものでなく，且全體が非常に早いテンポでよまれているので，一つづゝ下降する餘裕なく終りに至つたものである。その逆に一つの意味がまとまつていれば文章の中にあつて一段落の下降を見ることがある。Da ist das Meer nicht so stürmisch ⟶ und der Uuterschied zwischen Ebbe und Flut kaum merkbar. (18面 Unterhaltung)